

平時の「絆」を問い直す詩作の試み

高野吾朗

甲虫

毎日必ず通る細い路地を自転車で通り抜けて
いつものように右へ曲がり 長く垂れさがる
柳の枝を 今日片手で払いながら 自宅へ
向かっていると 歩道の一角に自転車が一台
転倒しているのが見えた そして その横で
痛々しげにうずくまっている白髪の高齢者の
両手両足からは だらだらと血が流れていた

「大丈夫ですか」と近寄る私に その男性は
「ああ お前か」と言うと 顔を歪めながら
私がさっき通り抜けてきた柳の方を指さした
「あの自動ドアは 人を選ぶ わしのような
特権階級には自動で開くが わしとは異なる
愚民たちには開かない」 苦しそうに微笑む
皺だらけのその顔つきには 見覚えがあった

私の自宅の庭の隅に 亡きわが妻が開墾した
小さな菜園の跡がある 妻の自慢はその土の
肥沃さで たしかに毎年 野菜は豊作だった
しかし彼女の死後 私にはとても同じ真似が
できず 菜園はいつしか雑草だらけになった
除草剤を買ってきて 私が雑草に撒くたびに
その男性がなぜか必ず 庭先を通りかかった

「そんな薬を土に撒くと 奥さんが泣くぞ」
いつもその一言だけを言い残し 彼は去った
それ以外のやり取りをしたことがないせいで

顔だけはわかるが 彼の名前も 家の場所も
今まで知らずにいたのだ 血だらけで朦朧と
している彼を抱え起こそうとして ようやく
物陰に佇む彼の妻らしき老女の姿に気づいた

「救国の英雄が路上で凶弾に倒れている時に
万難を排して駆けつけるのが 本当の国民だ
自分の体がすでに死んでいる場合は 死霊の
姿で 英雄の救助に馳せ参じる それこそが
真の国民の志だ」 おそらく男は 私にそう
言おうとしているようだったが あまりにも
物言いがたどたどしく 非常にわかりにくい

「ご迷惑かけてすみません 先日 撃たれて
逝去したあの物政治家の物まねのようです
すでに正気をすっかり失くしております」
と 物陰から老女の謝罪の声が聞こえてきた
「わしに救ってもらいたいなら献金しろ」と
口走っているらしき男性の足先に眼をやると
草履が脱げた後の裸足からも血が垂れていた

自転車が激しく横転した拍子に 履いていた
草履がどこかへ飛んでいったのだろうと思い
自転車を起こしてあげてから 周囲の側溝を
見て回った 一方 血だらけの老体は背中を
路面につけたまま 私の善意に興味も示さず
まるで甲虫があがくかのように 両手両足を
宙に向け それをゆるゆると 動かし始めた

その手足の病的な細さとは対照的に 男性の
口から出る言葉は あまりにも不明瞭ながら
いまだ横柄なままだった 「いつ狙われるか
わからない恐怖 激痛を今か今かと待つ恐怖
おまえのような下層階級には想像もできまい
特権階級の人間の人生には 必ず通り抜けて
しまわねばならぬ特別な数秒間があるのだ」

「この道を 自動車が一台も走れない空間に変えようと 本人は強く希望し 政治運動をしているつもりなのです もしもそうなるとこの界限の商売の全体に支障をきたすと叫ぶ反対派に撃たれたという設定らしいのです」老女の解説が続く中 金よりも大切なものを求めて足掻くかのごとく甲虫の手足は蠢いた

死期を悟ったわが亡妻が 最後に菜園に足を踏み入れた日 野菜を収穫しながら 彼女はこう言った 「蜂には向日葵が紫外線の源に見える 鳥には暗闇が様々な色の塊に見える 犬には草むらの匂いが重大な生活情報となる 私にもそんな才能が ようやく芽生えそうだが私の全身を炎が包んでいるのが見えない？」

もしも死なずに長生きしていたら いつかは妻も 物陰に佇むあの老女そっくりになっていたかもしれぬ 側溝のどこを探してみても甲虫の草履は見つからない 「早く見つけろ わしに従わぬ気か おまえも女どものように従わない権利とやらを愚かに吹聴する気か」そう叫びたがっているような顔つきの甲虫を

見おろしながら 老女は私になお話しかけた 「この人に命じられるがまま 私は毎年毎年 何度も何度も妊娠させられ おかげで何度も死にかけました 交尾と殺人は似ています」寒いのか 厚手の服を急に羽織る老女の姿は 軍服に着替える男のようで 逆に 暑いのか次第にぐったりし始める甲虫の血と汗の姿は

獄舎で死刑執行を待つ戦争捕虜のようだった 「そんな薬を土に撒くと 奥さんが泣くぞ」微笑みながら それだけ言って去っていった

あの人物とこの甲虫が同一人物という不思議
「私と最後まで暮らしたいなら この程度の
暴力は受けて当然です お金を払わなければ
何も手には入らない それと同じことです」

自動ドアを無理やり突き抜けるような勢いで
向こうから 一台の自動車が 私たちの方へ
まっすぐ疾走してくるのが見えた 正義感に
促された甲虫が態勢を整えようと焦りだした
自らの老体で車の侵入を妨げるつもりなのだ
運転席と助手席の男女は 口論中か または
求愛中か まるで前方に無関心の様子だった

「早くわしの草履を！」という声に 慌てて
側溝から飛び出した私の前に 草履はあった
それをつかもうとした私めがけて 車が来た
一瞬 車内の二人と私の表情が 全く同時に
爆笑と号泣の混合となった時 物陰の老女が
つかつかと夫に近寄って その襟をつかんだ
そしてそのまま家の中へと引きずっていった

人間のことを朝から晩まで無償で愛し 常に
深く信頼し続けて暮らしてきたペットたちを
老いを理由に安楽死させてやる仕事 そんな
獣医の仕事ぶりを 去っていく老女の背中に
感じつつ 私はその一方で このままここで
僕も終了かと 亡妻に尋ねようともしていた
目の前に青白い炎がありありと見えたからだ

人形遊び

これは あなたの故郷の家の片隅に ひっそりと
今なお放置されたままの人形たちについての詩だ

その人形たちを買ってもらった時 幼いあなたは
ファッションモデル風の数体の男女の人形の中に

首のない全裸の人形が二体 混ざっていることに
何の違和感も持たなかった そしてあの晴れた日

あなたはキッチンテーブルの上に人形たちを並べ
独りきりで遊んでいたのだ 居間のソファの上に

置かれた朝刊には あなたの知らぬ遠くの外国で
内戦が勃発し 多くの死傷者が出たという記事が

躍っていた 二体の首なし人形を取り囲むように
あなたは モデルの男女たちを 輪になるように

並べた あなたのすぐ後ろで 炎が徐々に上へと
立ち始めていることに あなたは気づきもしない

すると 首なし人形的一方が 大声を挙げながら
もう一方の胴体を ものすごい勢いで殴り始めた

「あの人は 人生でもっとも大事な人だったのだ
死なれてしまうと もう生きていけなくなるのだ

だが おまえは 医者なのに助けてくれなかった
蘇生の努力を怠った なぜだ ああ 許せない」

「あの患者はたしかにもう亡くなっておりました
蘇生しようにもすでに手遅れでした」と 相手が

いくら訴えても暴力は止まない 「死者の蘇生はこの共同体の義務だ 蘇生できない医者が悪だ」

惨劇を黙って見守る者たちの気持ちは同じだった
「邪魔せずに注視することこそが 何よりも大切

そしてそんな自分自身を嘲笑する それも大切」
遊び疲れたあなたは 人形たちの横で寝てしまう

そしてあの曇り空の日 目覚めた青年のあなたは
すっかり埃をかぶっている人形たちを久しぶりに

取り出し 懐かしそうに机の上に並べたのだった
遠く世界では 内戦に苦しむ国の数がさらに増え

あなたの後ろの炎は いまや天井まで達していた
モデルたちの輪の中で対峙する 二体の首なしの

一方が またも他方を殴っていた 殴られている
首なしが 嘆きの声を絞り出す 「こんな悪人を

救うために どうして私の内臓が使われなければならないのか
最も近い血縁というだけの理由で

なぜ この悪人の病んだ体に 私の善なる内臓が
移植されねばならなくなるのか これまで長い間

この悪人のせいで 私の人生は乱されてきたのだ
善なる他人の体に移植される方が まだまだ」

殴ることにすっかり疲れたもう一方が 喘ぎつつ
反論する 「血縁者のために犠牲になる それが

この共同体の義務だ 義務を遂行せずに恩恵だけ
受ける気か 早く内臓をよこせ！」 この二人に

すでに飽きたらしき周囲の者たちの今の関心事は
伝染病だった 「野蛮から文明へと伝染するのも

恐怖だが 文明から野蛮へ伝染が逆流し始めると
さらに恐ろしいらしい」 輪の中で 暴力は続き

あなたは年を取り いまや皺だらけ 臨終間近だ
今日は雨だ 眠るあなたの横で ラジオが告げる

「この国を除く世界の全ての国が 内戦状態で
平和に暮らせる場所は もはやこの国だけです」

あなたのために久しぶりに集まった人形の一つが
声を張り上げる 「今から始める儀式は その昔

遠き異国からこの地に伝来したという その名も
『胴上げ』と言いまして 善く生き続けた長寿の

者を皆でこうして祝うのです」 首なしの二体が
残りの人形たちの手で空中に舞い上がる 歓喜の

声を挙げながら 手を固く握り合う二体の真下で
人形たちが一体ずつ 胴上げをやめていく その

一つが呟く 「最も恐ろしいもの それは 一切
恐怖心を持たない心だ」 固い床の上に 二体が

あえなく落下し 手足がばらばらとなるその瞬間
目覚めたあなたの瞳が 目の鏡台に映る巨大な

炎に ようやく気づく この国のあちらこちらで
これと似た炎が すでに立ち昇っているとしたら

「ここもついに内戦？」 まだ恐がらなくていい
鏡面を覆う炎のすぐ後ろには 私がいるのだから

炎を弱火に戻して 少し待てば 香ばしい料理の
出来上がりだ あなたの歯でも咀嚼できるほどの

柔らかさだ 食事が済んだら あなたのその体を
隅々まで綺麗にしてあげる 最後に ひとつだけ

教えよう あなたの故郷に戻れば 首なしの首が
まだどこかにあるはずだ あなたの首と私の首だ

もやい直しの時刻

闇の中 互いの背をくっつけて床に就いている 君と私
闇が海ならば 二人はどちらも一艘の小舟だ 荒波の中
汚水で黒ずむ海上で 二艘の間の距離は広がりつつある

海の藻屑と化す恐怖に眠れないらしく 君が小声で問う
「幼稚園に入る以前の記憶で 鮮明に覚えているものが
一つでもある？」 私に問うたのか 自らに問うたのか

私の当時の記憶の中に 共働きだった両親の姿は皆無だ
浮かんでくるのは 寝たきりの病身の祖父が 朝も晩も
天井を睨みながら休むことなく独り言を唱え続ける姿と

私を愛し 朝から晩まで休むことなく 私の世話をする
祖母の姿だ 自らにとって唯一無二である孫の手を引き
祖母は毎日 雨の日も風の日も 町中を散歩して歩いた

そして毎日 飽きることなく 同じ遊びを私と楽しんだ
目に入る建物を 思いつきで順番に指さしていき その
中に隠されている秘密を想像し 即興で説明する遊びだ

杖がなければ歩くのも一苦勞の老体となってしまった今
かろうじて思い出される 祖母との「遊び」の思い出の
一つ目は 町で最も古い伝統を誇る進学校の木造校舎だ

祖母が言うには その内部に人間は一人もおらず 羊や
水牛 山羊や駱駝 鯨や象といった夥しい野生の群れが
上へ下へとひっきりなしに移動を続けているのだそうだ

この国は食料の輸入が止まるとすぐ滅びてしまうのだと
祖母が続けて言ったような気もするが 当時の幼い私に
「輸入」などわかるわけがない 次に思い出されるのは

町で今なお最も巨大な敷地を有する発電所だ 得意げに

私は説明した あの建物が立っているのは 月の表側で
エレベーターではるか地下に降りると 月の裏側に着く

そこはまだ誰のものでもなく 住んでいるのは神様だけ
私の説明に微笑みつつ 祖母はたしかこう言ったはずだ
残念ながら 何もないように見えるその無重力の世界も

実は人間が作ったものなのだ すでに人間の土地なのだ
祖母との「遊び」の思い出はこれだけだと思っていたが
荒れ狂う闇の海の中 汚染された海面に翻弄されながら

もう一つだけ思い出した それはとてつもなく暑い日で
祖母によると その日からしばらくの間は 家の中でも
外でも常に裸でないと 逮捕され刑務所行きだという

ぎらぎらと輝く太陽の下 祖母と二人して 裸のまま
町を散歩すると 路上の人々は一人残らず服を着ており
不安になって祖母を見上げると その顔はまるで異教の

世界に初めて迷い込んだ宣教師さながらだった気がする
行きかう人々の好奇と畏怖の視線にひたすら耐えながら
歩いていると 超高層ビルの入り口から 私と同年代の

子供が独りで外に出てきた その子のシャツには英語で
MAKE LOVE NO WAR と たしか書いてあったはずだ
おい 逮捕されるぞ！ 見知らぬその子に 思い切って

そう呼びかけるべきか否か 私が迷っていると 祖母が
ビルの最上階を見上げながら呟いた これは 渡り鳥の
休憩塔なのだ 無数に並ぶどの穴も部屋の入り口なのだ

ここで寝泊まりする鳥が増えれば増えるほど この塔は
さらに高くなる 鳥たちは死んだ人間の魂も連れてくる
一つだけではとても足りず こんな塔が町中にあるのだ

壁という壁が蔦に覆われている すぐ近くの館の中へと

シャツ姿の子供が姿を消すと その玄関を見つめながら
祖母が再び「遊び」を始めた あれは蒐集家の家なのだ

「蒐集」とは何だろう 孫の無知などいっさい気にせず
祖母は続けた あの館の中には 同じ格好の裸の銅像が
たくさん陳列してある どの像も首から上が消えている

どの銅像も 自分の首を まるでドッジボールのように
両手で捧げ持っていて おまけに自分の方へ向けている
どの銅像にも名前はなく どこかに売られることもない

どの銅像もいわば複製だ 蒐集家はとても貧乏なくせに
とても誇り高く 常に億万長者気取りだ 良心も善意も
進歩も全てくそくえらとっていて 外出が嫌いなのだ

私を独り路上に残し 祖母が館の玄関を開けて 中へと
姿を消してから ものすごく長い時間が経った気がする
泣きながら家に帰ると 私は矢も楯もたまらず 祖父の

枕元に座った 彼の独り言はいつも通りだ 「この国の
葬式のやり方は昔からずっと一緒だ 弔いに来た人間は
遺体の前で 自分の顔を自らの長い爪で 何度も何度も

かきむしり 血だらけにしないといけない さもないと
無礼者扱いだ わしの葬式でも 皆そうせねばならぬ」
だが 祖母がいなくなったと告げた途端 祖父は初めて

異なる言葉を発した 「あいつはな おまえが生まれる
はるか以前に死んでおる 名誉の戦死だ わかるか？」
もちろん 当時の私に そんなことがわかるわけがない

「この国は自らの責任を早く忘れたくて わしらの死を
今か今かと待っておるんだ！」 祖父の声が久しぶりに
心の中をこだましたかと思うと 続いて闇の海のはるか

彼方から君の声がまた聞こえる 「地球上の生物の中で

最も早く絶滅しそうなのは 巨大なものか 微小なもの
そのどちらからしい」 ここからは君の幼年時の記憶だ

全裸の奇妙な二人組を 路上で偶然 目撃した幼き君は
怯えながら自宅に戻り 自分の部屋に駆け込んだ だが
君の後から 見知らぬ誰かが玄関を開け 侵入してきた

当時の君の家には 「絶対に入ってはならない」と固く
言われていた広い部屋が一つあり そこに何かあるのか
君は知らなかった 見知らぬ者は その部屋に侵入した

英語が書いてあるTシャツ姿の君が 恐る恐る 部屋の
扉を開けて中を覗くと 無数の人影が立ち尽くしていて
どれが先ほどの侵入者なのか もはや見分けがつかない

すると部屋の奥から 「なぜそんな服を着ておる この
ヒコクミン！」という声が出た 巨大な声だったような
微小な声だったような 君の記憶はその辺りが不明瞭だ

明瞭なのは その声とともに そこにいた全ての人影が
自らの両手から 重そうな球体めいたものを ぼとりと
一斉に床へ落としたという記憶だ 「私のせいで 何か

とても貴重なものが 台無しになったのかもしれない」
そう言いながら 君がこちらを振り向こうとしはじめる
君が今までの君を無責任に手放そうとするのなら 私も

そうしてみようか ねっとりした時間の厚みを感じつつ
この二艘の小舟が お互い同士をもやい直しはじめたら
再びこの大海も 静かに きらきりと 光輝くだろうか